

常なく、11月8日局麻下に鼻外法で右篩骨洞手術を行なった。篩骨洞のポリープを鉗除後、硬い骨壁を認め、術中レ線撮影により下垂体腫瘍前壁と考えられた。これらの所見より下垂体腫瘍を疑い脳外科で12月6日、経蝶形骨洞法でトルコ鞍に達する前に黄褐色の液体が吸引され、蝶形骨洞粘液嚢腫であることが判つた。

本症例は既往の副鼻腔炎手術や一過性の複視のみという臨床症状の軽微さが蝶形骨洞粘液嚢腫を疑わせたが、レ線学上あまりにも広汎な骨破壊像を示したために腫瘍との鑑別が困難であつた興味ある1例である。

6. 左側腎に発生した Wilms Tumor の1例

(消化器外科)

喜多村陽一・永田 早苗・志村 紀子・
長岡 巍・大森 尚文・秋本 伸・
高崎 健・中村 光司・小林 誠一郎
(放射線科) 大川 智彦

今回、われわれは小児 Wilms 腫瘍を経験したので、症例を呈示し、合せて、術後療法について若干の検討を加えて報告する。

治療医学の進歩に伴ない、従来小児疾患の重要部分を占めていた感染症の多くは、治療予防が可能になつてきた反面、小児の悪性腫瘍が近年注目を集めるようになってきた。

患者は、6歳の男児である。左腹部腫瘍を主訴として来院した。腹痛、血尿、多尿、などの自覚症状は認められなかつた。入院時血液検査値正常、Creatinine Clearance 正常であつた。

Echo, Angio, CT スキャンなどの検査で、左腎腫瘍と診断。昭和55年1月22日、左腎臓摘出術施行した。術中所見では、腎腫大し、腸間膜におおわれ、腎上部では3カ所に突出を認めた。他への浸潤なく、転移も認めなかつた。

大動脈周囲、腎動脈周囲にリンパ節の腫張認めず、腎動脈根部で切斷腎を摘出した。

摘出標本で見ると、腎腫瘍は線維性の Capcel で全周被われ、他への浸潤は認めず、組織的には、腺管様構造をなす腎芽組織を含み、Roseff 様構造を認めた。以上の結果、stage I の Wilms 腫瘍と考える。

術後療法は、アクチノマイシン、オンコピン、放射線の合併療法を施行した。術後療法中白血球減少、食欲不振出現するも、対症療法で改善す。

日本小児科学会悪性腫瘍委員会の昭和46年～50年まで

の、Wilm 腫瘍に対する全国集計では、各施設で、われわれの術後療法がおこなわれているが、予後の改善には、多剤併用、放射線療法が、もつとも効果が大である。また再発 Wilms 腫瘍に対し、多剤併用と放射線療法の合併治療により、治療したとする報告も多い。

以上の結果、副作用に注意をはらいつつ、早期より、大量、多剤併用、放射線の合併療法が、Wilms 腫瘍に対する最良の術後療法と言える。

7. レーザーによる母斑治療の研究

(形成外科)

○若松 信吾・今村 芳子・佐々木健司・
野崎 幹弘・林 道義・平山 峻
(医工研) 桜井 靖久・宮本 博幸

レーザーを使用して、皮膚母斑の治療を行なうには、皮膚の種々の波長に対する反射、吸収、透過率を熟知した上で治療にあたるのが重要である。分光機を用いてそれらの検索を行なつた。

対照例：正常皮膚についての検索法としては、400nm から 1,200nm までの反射率と透過率を自動連続測定した。正常皮膚は14/1,000インチの厚さにパジェットダートームで採取し、その一部を酵素ディスペーゼを用いて皮膚の基底膜部より表皮細胞層と真皮層に分離し、それぞれの分光特性を測定した。更に赤血球、市販のメラニンについても測定を行なつた。

臨床例：巨大色素細胞母斑、青色母斑、太田母斑、単純性血管腫について正常皮膚と同様に測定した。

測定結果：正常皮膚では表皮、真皮層とも 400nm で最大吸収率を見、800nm 付近まで吸収率は急激に低下し、以後なだらかとなり、1,000nm 付近で最低となつた。赤血球は 400, 600nm で最大吸収性を示すが、70nm 付近で急に透過性が増加した。メラニン色素は 400nm で最高の吸収率を見、以後徐々に透過性が増加した。色素性母斑の表皮層と同様なパターンを示したが、真皮層では 400nm で最大の吸収率を示した後、1,100nm 付近までなだらかに光吸収性が低下する特異型を示した。血管腫では正常皮膚と同様なパターンを示したが、これは皮膚採取時に血液を失うためにその特異性が表現されないためと思われる。

8. 本学糖尿病センターにおける糖尿病性壞疽12例の臨床的考察

(糖尿病センター)

○川名 正敏・新城 孝道・小田桐玲子